

シンポジウム

嶺岡牧の姿に迫る

要 旨

【日時】 2017 年 3 月 4 日 13:00～16:30

【場所】 千葉県酪農のさと



細野 4 区に残る石切跡（母岩と残石）

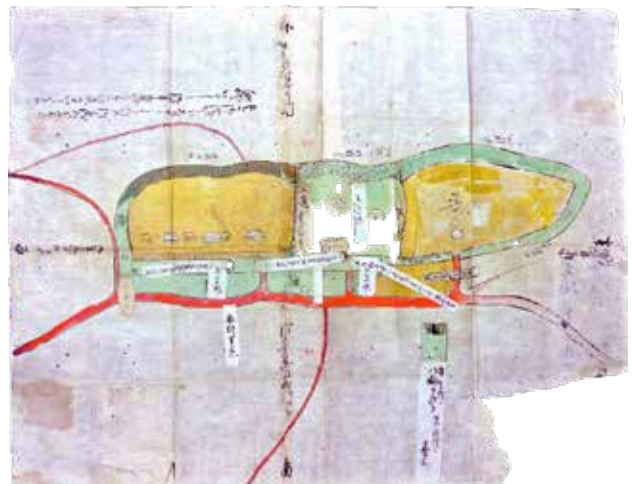
目 次

解題 日暮晃一	ii
基調講演	
1) 嶺岡牧が地域経済を活発にした 日暮 晃一	1
2) 古文書からみた 17 世紀の嶺岡牧 金澤 真嗣	9
3) 鴨川市域の集乳所を訪ねて 滝口 巖	17
コメント	
1) 近世牧の魅力発信と課題 吉林 昌寿	29
2) 文献にみる嶺岡牧研究の現状 岡田 晃司	30
3) 未来の歴史文化遺産を育てる 川口 友子	31
展示資料	32

【日程】



12:30	開場	
13:00－13:05	開会の辞	
13:05－13:10	解題	
13:10－13:40	基調講演	1) 嶺岡牧が地域経済を活発にした 日暮 晃一
13:40－14:10		2) 古文書からみた 17 世紀の嶺岡牧 金澤 真嗣
14:10－14:40		3) 鴨川市域の集乳所を訪ねて 滝口 巖
14:40－15:00	休憩	
15:00－15:15	コメント	1) 近世牧の魅力発信と課題 吉林 昌寿
15:15－15:30		2) 文献にみる嶺岡牧研究の現状 岡田 晃司
15:30－15:45		3) 未来の歴史文化遺産を育てる 川口 友子
15:45－16:20	討論	
16:20－16:25	総括	
16:25－16:30	閉会の辞	



解題

日 暮 晃 一

わくわくどきどき過ごして

嶺岡牧は、世界遺産級の複合的日本食生活近代化遺産だが、科学的調査研究は皆無と言って過言で無く、嶺岡牧の形や大きさなど基礎的なことさえ分かっていなかった。そのため、安房地域再生の巨大な資源である嶺岡牧を活かせずにいる。そこで、2009年から、嶺岡牧の実態を総合的に捉える嶺岡調査を行うこととした。

嶺岡牧調査の結果、嶺岡牧は以下の点で、他の江戸幕府直轄牧と異なる個性的な牧であることが判明した。

1)一面草原が広がる景観ではなく野馬土手により牧を細かく分けた囲い地で、牛馬の水飲み場、仮囲など牛馬の飼養管理を行う施設が数多い景観であった。

2)江戸後期も舎飼いが行われ、濃厚飼料の給餌も含めた管理型放牧が行われていた。

3)仏典に最高の食物として出てくる醍醐の普及を目指して八代将軍徳川吉宗が嶺岡牧に白牛を放ち搾乳を始めたことから、日本で最初に原動力生産の牧から産業の牧に移行したため、維新政権になっても嶺岡牧は続いたが、搾乳の拠点でなく酪農の中心的な生産手段である優良な乳牛の生産拠点となった。

さらに2016年度の調査で、地域住民が生業のため嶺岡牧に日常的に出入りし賑わっていたことや、江戸時代前期から上馬は捕獲した馬の1～2%に過ぎないこと、昭和前期に嶺岡牧周辺に立地した製乳工場は粉ミルク生産が中心であったこと、安房酪農最盛期には牛乳の集荷場が鴨川市だけでも111箇所あり酪農のまちであったこと、など嶺岡牧像を一変する発見、知られていなかった嶺岡牧文化に関する発見、およ

びそれと結びついたヘリテージマネジメント資源の発見が相次いだ。

そこで、嶺岡牧調査・嶺岡地域再生の一里塚として、これまでの嶺岡牧調査の到達点としての嶺岡牧像を浮き彫りにするとともに、今後の嶺岡牧調査の方向を確認する「シンポジウム 嶺岡牧の姿に迫る」を開催することとした。

本シンポジウムでは、以下の3点を目的とした。

第1に、嶺岡牧の実態の共有。科学的な嶺岡牧調査で、最近喧伝されている嶺岡牧像は無論のこと、先入観で結んでいた“これまでの嶺岡牧像はすべて誤りであった”，といっても過言でない姿が浮かびあがってきたことから、近年の嶺岡牧調査研究の成果を報告いただき、嶺岡牧の実態を共有する。

第2に、牧の実態に迫る調査研究システムの検討。嶺岡牧調査研究は、牧に対するステレオタイプの理解、僅かなデータに基づいた推論では先入観が大きく入り込み誤った姿を描き出し、してしまうことが確認された。サンプリングエラーとならない調査・研究の方法として、1次資料を中心とした悉皆調査と、そのデータベース化・公開、データ利用者のニーズ確認による調査項目の検討、の循環システムが不可欠である。このシステムを構築し、マネジメントする方法について議論する。

第3に、牧遺産を地域再生に活かす方法の検討。どのように、嶺岡牧及び関連歴史遺産を地域再生資源とするか、そのためにどのような調査研究が必要か、また、牧文化を地域個性とする千葉における広域再生の方向と、そこでの協働システムについて議論する。

基調講演 嶺岡牧が地域経済を活発にした

日 暮 晃 一

わくわくドキドキ過ごして

I. 歴史の舞台と人々の活動に迫る

嶺岡牧は、1)日本酪農発祥之地、2)地域畜産会社の誕生地、3)主要製乳企業の起業地、4)チッコカタメターノ食の中心地と、世界遺産級の複合的日本食生活近代化遺産である。また、耕地・林地としては生産性が低く使えない石山を、牧に利用することで必須な地に変えたことである。牛耕・馬耕の発明でおこった古代農業革命以降（飯沼 1980）、物理的エネルギーとなる近代社会まで、牧は経済基盤である原動力生産基地として、社会に不可欠な地であった。使い物にならない地を不可欠な地に変えた土地利用の発想法は、地域個性を活かしたランドデザインを描く際にポイントとなる。この両面において、嶺岡牧は安房地域に残る巨大な歴史文化資源といえる。

しかし、これまで嶺岡牧に対する科学的調査・研究は、金木（1961）、大谷（1993）が僅かにみられるだけで進んでいなかった。そのため、嶺岡牧の基礎的なことさえ分かっておらず、巨大資源との認識さえ共有されずにいた。そこで、嶺岡牧の基礎的な実態を明らかにするため、2009年から嶺岡牧調査を行った。嶺岡牧調査は、考古、古文書・文書、民俗資料、ヘリテージ資源の各面を柱に、trans-disciplinary な調査を実施とした。

今回の調査以前は、嶺岡牧の埋蔵文化財は嶺岡東牧、嶺岡西牧、柱木牧の馬捕り場と、総延長2 km弱の野馬土手しか周知でなかった。今回の考古学調査で以下が得られた。1)嶺岡牧の外周を廻るとみられる野馬土手を約40 kmと外周の1/2強を確認し、嶺岡牧の形状が地図上で捉えられ、南北17 km、外周約75 km

と、その大きさを確認した。2)野馬土手の配置から、嶺岡東牧・嶺岡西牧北斜面は、平坦な丘頂部・崖錐上部と高所を野馬土手で囲うのに対し、嶺岡西牧南斜面及び柱木牧は尾根に野馬土手を配置し谷を囲っている。このことは、尾根の放牧と谷の放牧があったことを示唆している。3)イギリスの囲い込み運動でつくられた圃場・草地を囲う石垣のように、野馬土手で嶺岡牧は細かく区画されている。これは、草地管理や給餌管理を行う管理型放牧が行われていたためと考えられる。4)40 kmの野馬土手のほか、1725（享保10）年に描かれた「房州峯岡山野絵図」にある元馬捕場を含めて5箇所の馬捕場、野付村毎の仮囲、42箇所の牛馬の水飲み場、33箇所の木戸、八丁陣屋や嶺岡畜産会社の本社跡、茶屋跡や畜舎などの建物跡、石切丁場など遺構が高密度に分布する。草原が一面に広がる小金牧、佐倉牧とは異なり、嶺岡牧は多くの建物・構造物のある景観だった。5)江戸道に設けられた西谷津木戸の大木戸は、古泉千樞が歌った「ここにありし牧の大木戸あけしとき馬の匂ひはみなぎりにけり」が示す、牧空間を遮断する門状の木戸であった。6)嶺岡牧は江戸幕府直轄牧のなかで唯一、野馬土手などの遺構に石を用いた牧だが、矢穴石を用いている遺構は、矢穴の特徴から11代将軍徳川家斉の治世に構築又は修復されたものである。

しかし、嶺岡牧での入会地利用に関する実態に迫れずにいた。そこで、2016年の嶺岡牧調査として、入会地の利用における幕府と村民との主体間関係に接近することを目的に、採石遺構の確認調査を行うこととした。

Ⅱ．嶺岡牧内で活発に行っていた採石活動

嶺岡牧内で村民が自由に行う経済活動として、炭焼きと採石が確認されている。この内採石に関する遺構として、1)嶺岡東牧の川代浅間の東方～二子～東に広がる蛇紋岩の石切遺構と、2)嶺岡西牧の馬之背北麓に広がる凝灰質砂岩の石切丁場、を確認している。しかし、これまでの調査は、あくまでも遺構の隅を断片的に捉えているに過ぎなかった。そこで、2016年度の嶺岡牧調査では、野馬土手沿いに形成されている馬之背北麓の石切関連遺構の確認調査を行うこととした。

1．位置と地形

嶺岡山北麓は、狭い間隔で7本の断層線が縦走している。馬之背は、嶺岡山の尾根部で千葉県最高峰である愛宕山の北に、断層でつくられた地塁で、大塚・猿塚の土塁を挟んだ北に位置する(図1, 図2)。尾根部は断層崖でそそり立ち、崖の下には崖錐が盾状に堆積している。この崖錐の外縁を廻るように牧を画す野馬土手がつくられている。



図2 馬之背北麓の野馬土手の配置と地区区分

地質は次の通り。猿塚は、「へそ石」,「嶺岡頁岩」と呼ばれている球顆状ノジュールを含む、泥岩に近い頁岩。猿塚南縁及び馬之背東縁は変成作用が進んだ蛇紋岩。馬之背は凝灰質砂岩からなる。馬之背の崖錐部には、直径が5 mを超える砂岩の巨礫が点在している。



図1 3本目の地塁である馬之背(左から愛宕山, 猿塚, 大塚, 馬之背)

2. 地区別にみた採石遺構

(1) 細野地区

馬之背北麓は、嶺岡牧に接して細野と北風原の2村が接している。細野に接したところは、野馬土手が埋め立てられて現在みることができない旧キャンプ場の敷地を除き、木戸により4区に分けられる(図2)。

1) 1区

1区とした、細野の愛宕神社西脇の野馬土手沿いには、採石に関する遺構は確認されていない。が、キャンプ場の建物が取り壊され、これまで建物に隠れていた、垂直の割れ面を持つ巨礫が並ぶ姿が現れた。野馬土手と接していないためこの巨礫に対する調査は実施していないが、石切遺構の可能性が高い。



図3 巨礫の母岩と斜面下の残石(南から望む)

2) 2区

旧キャンプ場北西縁の木戸から始まる細野2区は、鑿を入れる矢穴があいた石切の母岩と切った石を放置した残石(図3, 図4), 大きな石材を確保するために掘られた採石坑, 石を成形する時に出た石の破片が塚状になった木端塚等が、野馬土手に接して南北に並んでいる(図5)。また、矢穴石を積んだ野馬土手と、石の生産・消費遺構がセットで残っている。採石遺構脇に建物跡の可能性のある平



図4 斜めに割れたことを示す母岩と残石(西から望む)



図5 野馬土手を挟んで並ぶ石切遺構(左から、採石坑、木端塚、野馬土手、母岩と残石)

坦地があり、注目される。

母岩と残石は、途中から矢穴とずれて割れたため、石を放置したことを示している。採石坑は、1辺 4.1m の方形で、深さは約 1 m (図 6, 図 7)。脇に木端塚が形成されている。

3) 3 区

野馬土手沿いに採石遺構が無く、2 区と 4 区を繋ぐ道が野馬堀沿いにつくられている。



図 6 採掘坑 1 と木端石塚 1 (東から望む)



図 7 採掘坑 1 と木端石塚 1 (北から望む)

4) 4 区

巨礫を用いた 3 区－4 区の木戸脇に、接近した 2 基の採石坑、3 基の木端塚 (図 8～図 13)、及び矢穴が残る母岩と残石が多数広がっている (図 14)。4 区西端の木戸近くに巨礫の母岩と残石 (図 15)。この間に 1 基の木端塚と (図 16) 母岩が残る (図 17)。また、建物跡とみられる平坦地が、採石坑脇と西端につくられている (図 18)。



図 9 採掘坑 2 (方形, 1 辺 8.4m, 深さ 2.8m)



図 10 1.7m の土手が廻る採掘坑 3 (方形, 1 辺 9m)



図 8 接して穿たれた採掘坑と木端塚 (左から採石坑 3, 木端塚 3, 手前の木端塚 2, 木端塚 4, 採掘坑 2)



図 11 径約5mの木端塚2



図 12 EW 約7m×NS 約3mの木端塚3



図 13 径約4mの木端塚4



図 16 北端部のみを捉えた木端塚5



図 14 採掘坑3脇の母岩



図 17 土手の切れ目に残る母岩



図 18 野馬土手と木戸に囲まれた平坦地



図 15 4区西端に残る巨礫の母岩と直方体の残石(左端)及び薄板状残石(母岩の右)

Ⅲ. 30 間毎にあった牧への入り口

1. 多くの木戸が残る嶺岡牧

嶺岡牧では、現在までに 33 箇所の木戸跡が確認されている。これは、牧の面積が 10 倍ある小金牧内の下野牧と中野牧の絵図に印されている合計木戸数に匹敵する。このように、絵図には描かれているものの、江戸幕府直轄牧でこれまでに確認されている木戸跡は、小金牧内を通る水戸街道の木戸の 1 箇所のみである。しかも、発掘調査で極一部を確認しているに過ぎない（吉田 2006）。これに対し、野馬土手と連続して木戸の姿を多数みることができる嶺岡牧は、特筆される。

嶺岡牧の木戸は以下のヒエラルキーが認められる（日暮ほか 2015a）。

1 段階：大土手を切っただけの木戸。

2 段階：2 本の高い土手を食い違いにした木戸。

3 段階：高い土手で虎口状の枡形をつくりだした木戸で、しばしば木戸外部の土手を段切りし、馬頭観音等の石仏を祀る。

4 段階：入り口に常夜灯を設けた木戸。

嶺岡牧に構築されている堅固な大木戸は、白牛を江戸に運ぶ江戸道との関係で捉えられるものと考えられた（日暮ほか 2015b）。

2. 馬之背北麓の木戸

（1）細野地区

野馬土手沿いに石切丁場が展開している細野地区には、木戸が 30 間を基本に築かれている。細野地区の木戸は、以下の点から確認できる。1)野馬土手の切れ目にある。2)木戸以外の野馬土手より大きい、もしくはその部分のみ構造が異なる。3)木戸先端のみ野馬堀が無く、牧の外部と同じ高さとなる。4)牧外から入る道が残る。以上に加え、木戸脇に平坦地が形成されているという共通性がある。

1 区北西端の木戸は、土盛りの野馬土手の先端のみ礫が枡状に露出しており、西谷津木戸と極似している（図 19）。

キャンプ場建設で埋もれた地区と 2 区の境の木戸は、土手が高く築かれ、牧外からの道部分は堀がない（図 20）。

3 区との境の木戸も、野馬土手は石積みだが木戸は土盛りで、底は牧内の山道に繋がり、木戸の後に野馬堀が掘られる（図 21）。

3 区西端は 4 m の巨礫を木戸に用い、巨礫脇を通して集落の道に繋がる（図 22）。

4 区西端の木戸は、木戸のみ土盛りで、幅広くつくられている（図 23）。



図 19 礫が枡型に露出している細野 1 区の木戸



図 20 キャンプ場建設で埋もれなかった木戸



図 21 木戸の手前右から牧に入り木戸底の道に繋がる



図 22 巨礫の木戸左脇に集落への山道が通る



図 23 幅広く土盛りした木戸

(2) 村境の木戸

馬之背北麓での嶺岡牧の野付村である細野と北風原の境に張り出した尾根を 47m 横走する形で深い野馬堀を掘り、切通しの道のようにしている（図 24）。

野馬堀の入口を石葺きの土手で塞ぎ、木戸の土手両端 3 m を石積みしている。土手の両端を道分だけ空け、外の道と繋げている。土手に沿う武者走状平坦地の下に、建物跡とみられる平坦地が残っている。



図 24 細野と北風原の村境に築かれた木戸

(3) 北風原の大木戸

馬之背北麓で 3 段階の木戸は、北風原に 1 箇所確認されているに過ぎない。東西を沢に挟まれ北に張り出した狭い平坦面全域を木戸にしている。

東端は狭小の沢沿いに大礫を並べ、北の石積みした野馬土手に繋げている。大土手が L 字状になった角から 10m 西に行ったところに、1.2m の隙間を空けて、幅約 8 m の土手を直行させ、隘所をつくりだしている。また、直行土手の外面を方形に窪め、廓状の平坦面をつくっている（図 25、図 26）。



図 25 尾根斜面を切り急斜面とした隅櫓・郭状部



図 26 土手に囲まれた郭状平坦地と石積みの大土手

IV. 端石を牧構築用の石材に

馬之背北麓の嶺岡牧内は、広範囲に石切丁場が展開している。ここで切られた石は、野馬土手など嶺岡牧の遺構に使われている。しかし、遺構に使用されている石切の痕跡が認められる石は端石に限られている（図 27）。しかも、石切痕のある石の利用度は低い。このことは、遺構の石材入手のために石切を行ったのでは無かったことを表している。

一方、細野愛宕神社の神殿は関東一大きい石宮だが、この石宮及び階段の石材は、細名特有な構成物質・色・粒度の凝灰質砂岩を用いている（図 28）。長狭郷に稠密に分布する馬頭観音の基壇などの石材にも使われている。

このことから、嶺岡牧内での石切は嶺岡牧構築のためで無く、販売する石造物のための石材を入手する場であったと考えられる。嶺岡牧北麓の石切丁場の展開からみて、経済行為が牧内で活発に行われていたことが分かる。



図 27 野馬土手に積まれた三方に矢穴があいた石



図 28 細野石切丁場産の石を用いた石宮

V. 村民の共有地利用を活用して牧管理

今回発見された遺構から、馬之背北麓の嶺岡牧は、一面草原に牛馬が点々という景観では無く、建造物や構造物が多数みられる景観であったことが確認された。また、30 間間隔で設けられた木戸から、村人が日常的に嶺岡牧に入って利用しており、嶺岡牧での博打禁止令が発布されるまでに賑わっていたことが確認された。だが、嶺岡牧を石切丁場として利用していたことは、嶺岡牧に関する古文書には一切記されていない。このことから、野付村の人が牧内で薪炭材を採取することが自由であったと同様、石切も入会としての利用範囲と認識されていたことが推察される。

以上、江戸幕府は、入会地として牧内で村人が行う経済行為を認めることで、牧の日常的且細かく持続的な管理を実現する牧経営方式を採っていたことを、今回の調査結果から垣間見ることができる。

【文献】

日暮晃一・小笠原永隆・佐藤誠・牛村展子・千葉いづみ(2015a)嶺岡牧における木戸の構造と野馬堀の役割, 日本考古学協会第 81 回総会研究発表要旨, pp.64-65.

日暮晃一・牛村展子・小笠原永隆・千葉いづみ(2015b)「日本酪農之発祥地」における製乳事業創業期の酪農・製乳実態に関するフードシステム考古学的アプローチ, Jミルク, 平成 25 年度 乳の社会文化学術研究・研究報告書, 乳の社会文化ネットワーク, pp.1-30.

飯沼二郎(1980)日本の古代農業革命, 筑摩書房, 222p.

金木精一編(1961)安房酪農百年史, 安房郡畜産農業協同組合, 426p.

大谷貞夫(1993)安房国峯岡牧の再興をめぐって, 野中徹先生還暦記念論集.

吉田敬(2006)高田台牧・上野牧, 千葉県教育振興財団調査報告第 555 集 県内遺跡詳細分布調査報告書 房総の近世牧跡, 千葉県教育振興財団, pp.14-25.

基調講演 古文書からみた 17 世紀の嶺岡牧

金 澤 真 嗣

(有)アルケーリサーチ

I. 「空白」の 17 世紀

嶺岡牧は、18 世紀の享保年間に白牛が放牧され、後には白牛酪が製造された歴史的経緯から、「日本酪農発祥之地」として広く知られている。しかし、18・19 世紀と比べて、17 世紀の嶺岡牧がどのような歴史を歩んできたのか実はよくわかっていない。

17 世紀と言うと、1619（慶長 19）年に里見氏が改易されたことをきっかけとして、江戸幕府の直営牧となったものの、その後は衰退の一途をたどり、1722（享保 7）年に再興されるまで嶺岡牧は中絶状態にあった、というのが従来理解である。鴨川市（1996）の根拠ともなっている荒居（1962）に至っては、近世前期の嶺岡牧は代官の預地になっていただけで、幕府からは「放置状態」にあったと評価している。まさに 17 世紀は、嶺岡牧の歴史において「空白」の時代と言えるのである。

とはいえ、こうした見方に対しては、千葉県（2007）や大谷（2009）による近年の成果によって、元和～寛永年間に馬屋が設置され、幕府から飼料が支給されていたことが明らかにされており、修正を加える必要があるのは確かである。しかし、刊行物の性格や問題関心に左右され、上記の研究においても、17 世紀の具体像が十分に描き出されているとはいえない。

そこで今回は、鴨川市坂東の旧牧士家に伝来する御厩石井家文書を利用して（図 1、図 2）、17 世紀前期の元和・寛永年間（1615～1643）にスポットを当てることにより、「空白」の歴史を少しでも埋めていきたい。



図 1 牧士を務めていた鴨川市坂東の石井家



図 2 石井家に残されている古文書

II. 嶺岡山での放牧

はじめに、元和・寛永年間に嶺岡山で放牧されていた馬の数から紹介する。

史料 1 は、享保再興以降に「牧士」と呼ばれる「惣奎衆〔ソウモクシシュウ〕」らが、馬屋を管理していた石井市之丞と同作左衛門から、嶺岡山で「御馬数合三百式疋」を受け取った旨を記した古文書である。1633（寛永 10）年に作成されていることから、当該期、嶺岡山

では 300 頭ほどの馬が放牧されていたと推定することができる。

では、この 300 頭という数は、後の時代と比べて多いのであろうか、あるいは少ないのであろうか。1885 (明治 18) 年の写である「嶺岡牧起原及ヒ沿革取調」(嶺岡牧場事務所旧蔵) には、18 世紀末の頭数が以下の通り記録されている。

1793 (寛政 5) 年	466 頭
1794 (同 6) 年	550 頭
1795 (同 7) 年	615 頭
1796 (同 8) 年	608 頭
1797 (同 9) 年	678 頭

平均すると 579.4 頭の馬が寛政年間に放牧されていたことがわかる。この数と比べると、17 世紀前期の元和・寛永年間には、享保再興以降と比較しても少なくない数の馬が、嶺岡山に放牧されていたと想定できるだろう。

Ⅲ. 馬屋での舎飼い

放牧の一方で、長狭郡坂東村石井家と朝夷郡三原村 (現在の南房総市) 石井家の二か所に馬屋が設置されていた。

この馬屋を管理していた石井家が、舎飼い

に要した飼料や費用を算出し、幕府蔵方役人に提出するために作成した勘定書が残っている。それが、「房州ニ而御馬飼料之御帳」や「房州ニ而御馬糠藁草薪銭萬入目御帳」などのタイトルが付された、「御馬飼料帳」である。石井家文書中には、1621 (元和 7) 年から 1637 (寛永 14) 年にかけて、20 点ほどの「御馬飼料帳」が現存しており、元和・寛永年間の嶺岡牧を検討するうえで欠かせない古文書である。

「御馬飼料帳」を利用して、両村 (家) の馬屋で舎飼いされていた頭数と産地を一覧にしたものが表 1 である。表 1 からは、① 20～33 頭の馬が舎飼いされていたこと、② 他の幕府直営牧や南部藩から馬が移入されていたが、減少傾向にあったこと、③ 一年間にわたり舎飼いされていた馬が多かったこと、などが読み取れる。

とくに注目しておきたいのは③である。後年の嶺岡牧も含めて、自然放牧が原則の牧では、通年にわたり舎飼いすることは通常ない。馬屋につながるのは、野馬捕りした馬を上納する前に調教する際や、大雪による斃死を防ぐ際など、あくまで一時的なケースに限られている。つまり、通年にわたる舎飼いは、当該期の嶺岡牧でしか確認することのできない特

表 1 舎飼いしていた馬の産地と頭数

	単位：頭				
	房州	小金牧	佐倉牧	南部	不明 合計
1621 (元和 7) 年	13 (11)	13 (6)	1 (0)	4 (2)	2 (0) 33 (19)
1631 (寛永 8) 年	19 (9)	3 (3)			22 (12)
1632 (寛永 9) 年	28 (13)	1 (0)			29 (13)
1633 (寛永 10) 年	20 (8)				20 (8)
1634 (寛永 11) 年	21 (11)				21 (11)
1635 (寛永 12) 年	23 (18)				23 (18)
1636 (寛永 13) 年	28 (13)				28 (13)

註 1) 御厩石井家文書 3、4、5、191、193、202、B-89 より作成。

註 2) 括弧内の数字は一年間にわたり舎飼いされていた馬の頭数。

微なのである。

では、馬屋ではどのような飼料をどれだけ与えていたのであろうか。それを示したのが、「御馬飼料帳」から抜粋した史料2である。史料2では、房州産の栗毛一頭と鹿毛一頭に対して、米を月3斗5升、大豆を月7斗ずつ給与していたことが記されているが、これが馬一頭あたりの標準量である。米と大豆のほかにも、糠・藁・草を一頭あたり銭換算でそれぞれ月15文分与えるのが通例であった。

藁・草の乾草は、消化機能を安定させる粗飼料で、他方の米・大豆・糠は、運動や発育に必要なエネルギーを供給するのに優れた濃厚飼料である。大豆や糠は、松本藩や盛岡藩でも与えていたようだが、3斗5升もの大量の飼料米を与えていた事例は、現時点では嶺岡牧以外に確認できていない。このように、自然放牧では摂取できない高エネルギーの濃厚飼料を大量に給与していた点も特徴の一つである。

IV. 放牧式と舎飼式の組み合わせ

放牧式と舎飼式が導入されていたことを述べてきたが、この二つの飼養方式は相互に関連していた。

史料3には、1633（寛永10）年9月9日まで舎飼いされていた馬一頭が「上り目」となったので、幕府馬預を務める渥美九郎兵衛らの指示の下、代官手代・「惣もくし」・「犬狩」、それに石井家が立ち会い、放牧していた旨が記されている。「上り目」の解釈は難しいが、病を患った馬が回復したことを意味しているのであろうか。であれば、放牧されていた馬が病気を患った場合、馬屋で一時的に養育し、回復したあとに再び嶺岡山に放牧していたのかもしれない。

上記のように、舎飼いしていた馬を嶺岡山に放牧していた事例は、現在のところ15例ほど確認することができる。放牧の理由については検討の余地があるものの、放牧式と舎飼

式を組み合わせた管理手法が導入されていたのは間違いないだろう。

V. 牧を管理していた人びと

ところで、史料3にある「惣もくし」は、別の同時代史料では「惣奎衆」、「犬狩」は「惣犬狩衆」などと表記されている。前者の「惣奎衆」を務めている人物は、享保再興以降に「牧士」に任命される家と重なっている可能性が高い。後者の「犬狩」は、その名称から推測するに、馬を襲う山犬を駆除することを職掌としていたのであろうか。

また、史料3のケースでは、幕府馬預の指示を受けて放牧していたが、幕府に馬を上納する場合、徳川家光の側近六人衆の一人である阿部豊後守忠秋の命を受けて、馬預が現地の石井家に対して指示を出していたことが、史料4や「御馬飼料帳」などから確認可能である。

これらの事実や石井家に残るほかの古文書なども踏まえ、寛永年間に嶺岡牧の管理に携わっていた関係者を整理すると、次のように図式化できる（図3）。

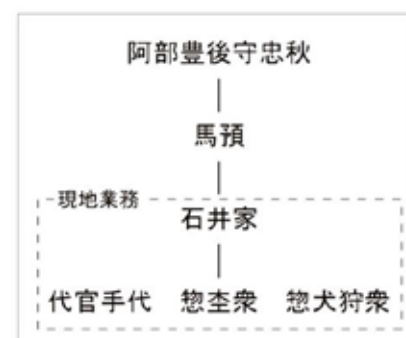


図3 寛永期の支配系統

もちろん、このほかにも数多くの地域住民が嶺岡牧に関わっていたと考えられるが、この点に関しては今後の課題である。

VI. おわりに

これまで述べてきた通り、17世紀の嶺岡牧

は、他の牧にはみられない独自の飼養方式が導入され、馬の管理が行われていた。そして現地の業務に関しては、幕府役人の指示の下、後に「牧士」と呼ばれる地域住民を中心に担われていた可能性が高い。

今回検討した以外にも、嶺岡牧にはまだまだ眠っている歴史がたくさんある。これらの歴史を紐解くためにも、古文書をはじめとする史資料へアクセスしやすい環境を整え、誰もが調べ、学べるようなプラットフォームを構築することが必要なのではないだろうか。

【文献】

荒居英次（1962）徳川吉宗の洋牛馬輸入とその影

響，日本歴史，174，pp.72 - 81.

千葉県（2007）千葉県の歴史 通史編 近世1，千葉県，pp. 1 - 1097.

鴨川市（1996）鴨川市史 通史編，鴨川市，pp. 1 - 1025.

森嘉兵衛（1960）南部の馬，地方史研究協議会編，日本産業史大系3 東北地方篇，東京大学出版会，pp.177 - 187.

大谷貞夫（2009）安房国峯岡牧の再興をめぐって，江戸幕府の直営牧，岩田書院，pp.119 - 150.

塚本学（1984）歴史と民俗にみる近世の馬，網野善彦著者代表，日本民俗文化大系 第6巻 漂白と定着＝定住社会への道＝，小学館，pp.496 - 527.



史料 1 1633（寛永 10）年「ミのおか山ニ而御馬請取之事」



ミのおか山ニ而御馬請取之事

御馬数合三百式疋 当年式才共

右請取申候所実正也、仍如件

寛永拾年酉

九月七日

石井市之丞殿

同 作左衛門殿

の
■^(かねて) 式丁請取申候

山田

川名

あら川

「

山田

四郎

中村

奎

惣牧

史料 2 1634 (寛永 11) 年「房州二而御馬飼料之御帳」



房州立御馬飼料之覚

一米四石壹斗三升

房州立栗毛御馬壹疋

右是ハ酉正月朔日方同年極月廿九日迄十二ヶ月分、但壹ヶ月二
米三斗五升ツ、小六ヶ月引申候

一大豆八石貳斗六升

同御馬壹疋

右是ハ壹ヶ月大豆七斗ツ、日数右同断

一米四石壹斗三升

同所立鹿毛御馬壹疋

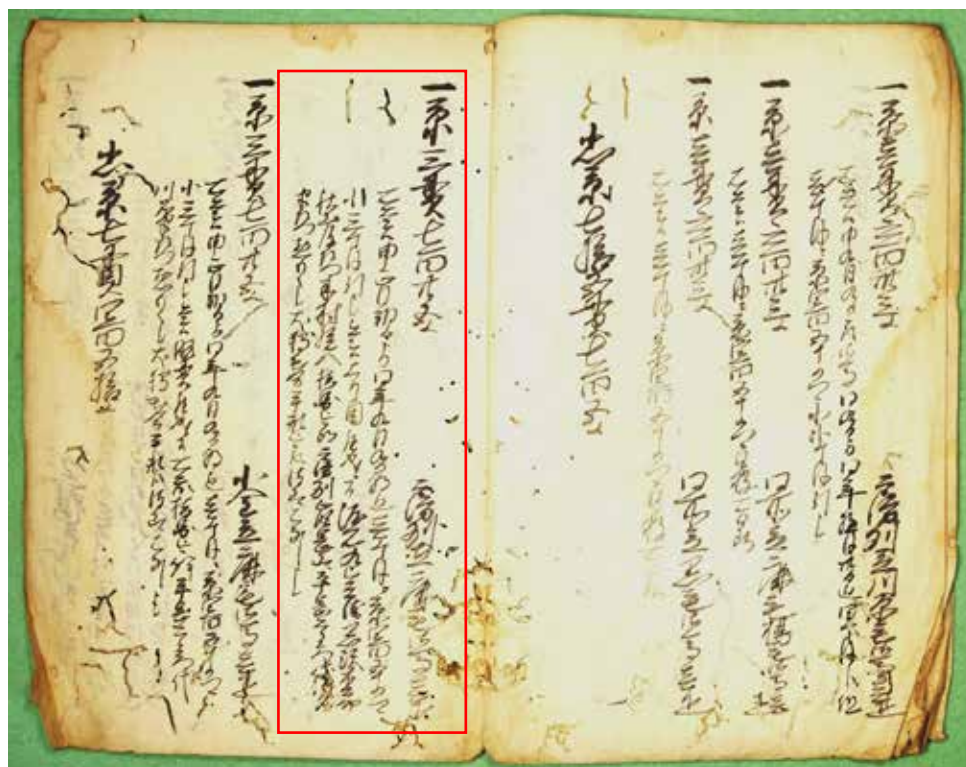
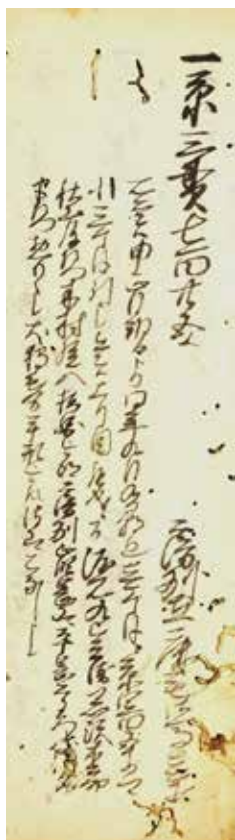
右是ハ壹ヶ月二米三斗五升ツ、日数右同断

一大豆八石貳斗六升

同御馬壹疋

右是ハ壹ヶ月大豆七斗ツ、日数右同断

史料3 1633（寛永10）年「房州二而御馬糠藁草薪錢萬入目御帳」

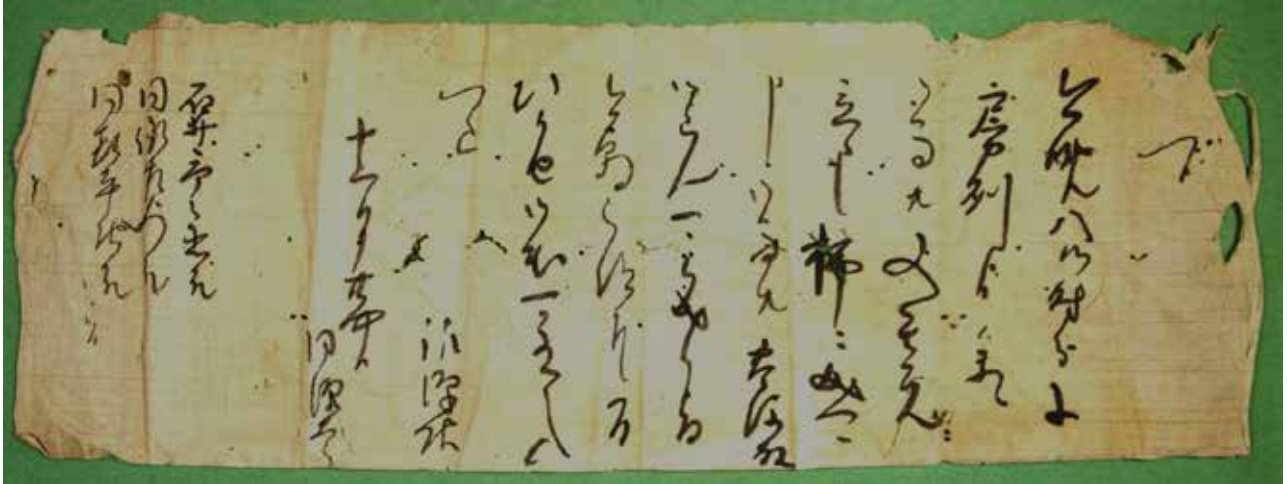


一京三貫七百廿五文

房州立鹿毛御馬老正

右是者申正月朔日より同年九月九日朝迄老ケ月二京四百五十文ツ、
 小三ヶ月引申候、是ハ上り目罷成候間、渥見九郎兵衛・黒沢奎助
 秋山弥左衛門・木村孫八指図を得、房州嶺岡山へ平岡二郎右衛門代川名
 半左衛門・惣もくし・犬狩出合、手形を取彼山へはなし申候

史料 4 「(豊後殿御馬御覧のため牽引につき書状)」



以上

今晚八ツ時分に

房州より参候

御馬共、又其元二

立申候払二成可

申御馬共、豊後殿

御らん可成候旨

今朝被仰下候間、

ひかせ御出可有之候、

以上

十二月廿四日

諏源次

同源太郎

石井市之丞殿

同作左衛門殿

同喜平次殿

参

基調講演

鴨川市域の集乳所を訪ねて

滝 口 巖

鴨川市郷土史研究会

Ⅰ．安房酪農史を集乳所にみる

南房総嶺岡山系は日本酪農発祥の地として知られているが、鴨川市域一帯もかつて安房酪農王国といわれ、一翼を担った地域としての歴史がある。明治乳業主基工場跡、森永乳業発祥の地やその関連事業体、鴨川酪農協同組合の製乳プラント跡、製罐、冷却装置、タンクローリー等の製造などで貢献し、現在もプラントメーカーとして躍進している安田ファインテ(株)など顕著な企業は無論のこと、今、市内の道路際など随所に散見され、ヘリテージ化されつつある集乳所の佇まいは、牛乳の集乳所として酪農の歴史やこれからの課題となることを我々に語りかけてくる。

一時期は—1960（昭和 35）年～1963（昭和 38）年頃—安房地域に 300 箇所以上集乳所が設置され、乱立とまで言われた頃がピークであったが、その後酪農家の減少や多頭化飼育への移行などがあり、タンクローリー車の発達や交通事情の好転などと相俟って個別に集乳が開始されると、大半はその役割を終えることとなった。今や、市内 27 ヶ所の酪農家のうち 3 軒が利用するだけとなり、2 ヶ所が稼働するのみとなった。この集乳所の変遷について、2016（平成 27）年度から調査をした。この調査を通し、酪農事情について多くのことを語りかけてくるので、地域酪農の歩みや課題などについても考えてみた。

調査の方法は地区別に農家を訪ねて酪農について—とりわけ集乳所即ち乳牛の飼育、搾乳と利用についてヒアリングをし、わかる範囲の事柄をまとめた。その結果、先ず実状についてから述べてみたいと思う。

Ⅱ．鴨川市域の集乳所

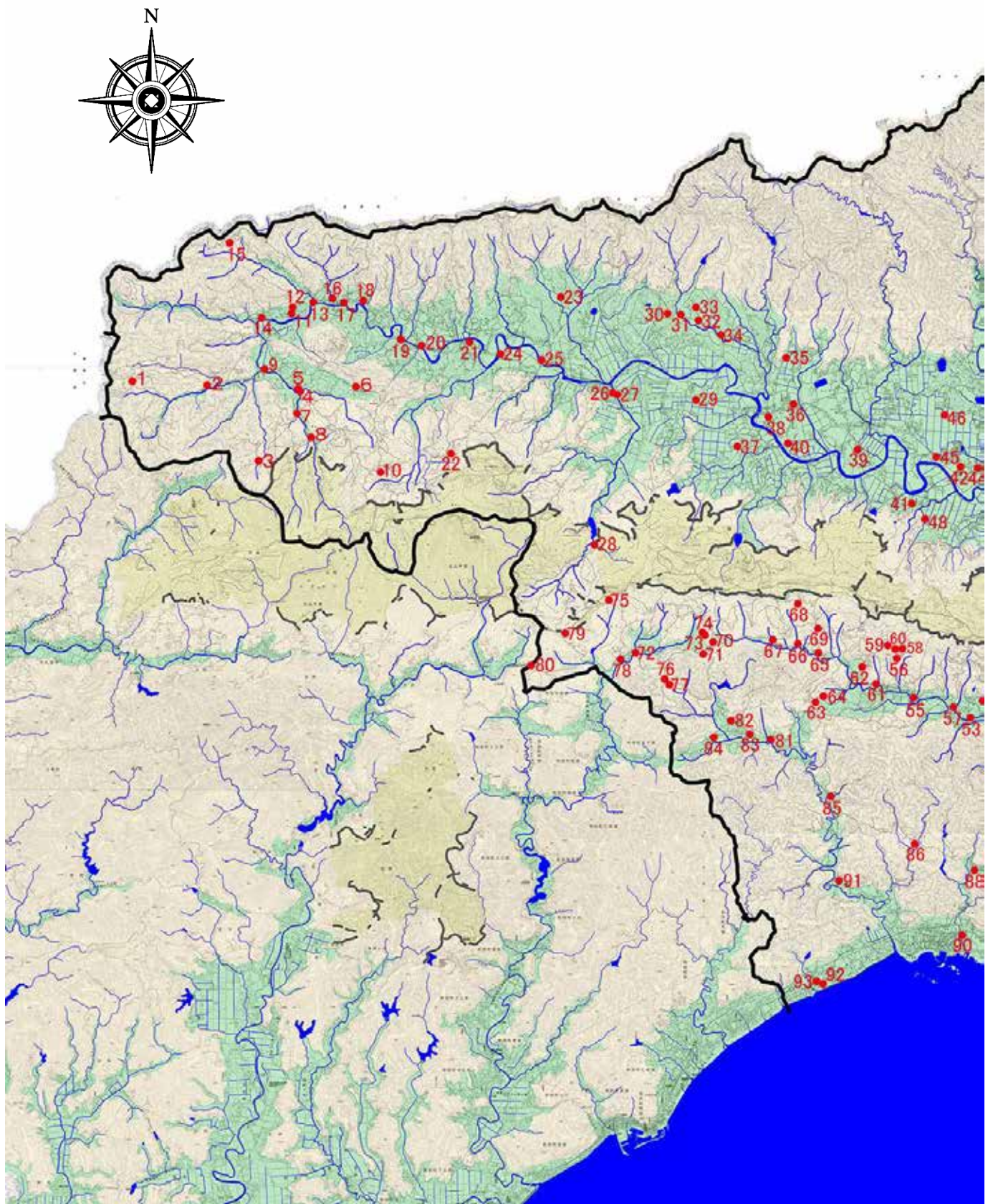
集乳所の設置箇所は、市内 111 の所在が確認された。

地区別には大山 20、吉尾 9、主基 13、田原 7、曾呂 36、江見 4、太海 4、鴨川 1、西条 4、東条 7、天津 4、小湊 2 であった。

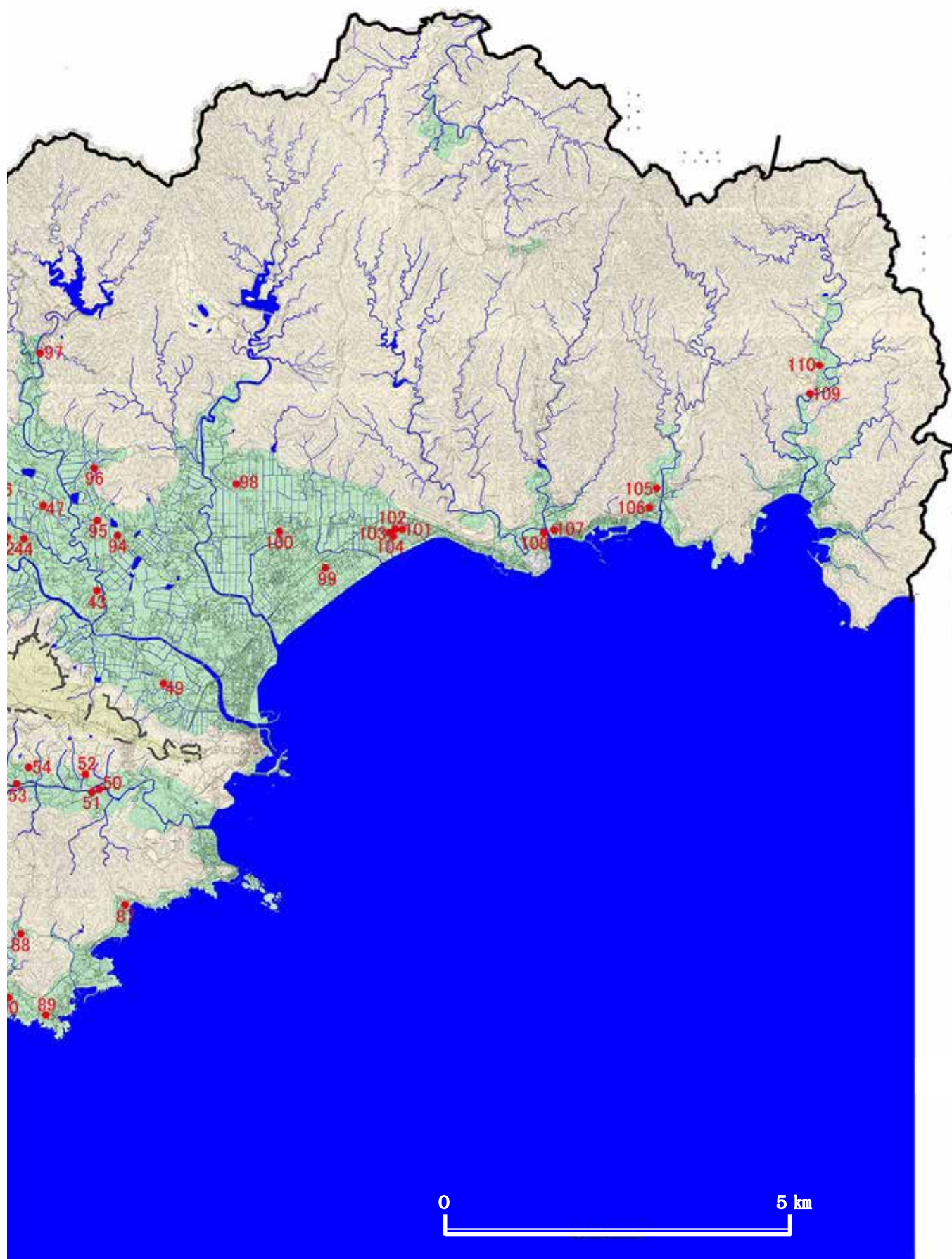
実状は、形が残存しているもの 45、土台だけが 64、実働しているところが 2 であった。現在、市内の酪農家は 27 軒で、内訳は、大山 1、吉尾 3、主基 5、田原 1、曾呂 10、江見 4、東条 2、天津 1 軒で、そのうち 3 軒は集乳所へ、24 軒はミルクカーが各戸に設置してあるので千葉ミルク酪農協で集乳している。

集乳事業者別に見ると、森永系 20、明治系 60、鴨川酪農（雪印）系 27、高梨乳業 1、高梨煉乳 1、不明 2 であった。

施設は、建物の広さ間口 2～3 間、奥行 1.5～2 間の間取りで、内部仕様は、水槽、洗い場、給排水設備がコンクリートのタタキに設置され、水槽は当初牛乳罐を直接入れて冷やしており井戸水や山からの水などが張られていたが、後に冷却機（循環式）やバルククーラーへと変わった。その他、計量器（台秤）記録用の黒板、事務机などがあり、計量記録、納入者などが報告されていた。壁面にはポスターや広報、感謝状や表彰状などが額装で掲げられてあるところも見受けられた。外部は軽量鉄骨造トタン張りが大半で、集乳所（受乳所）の名称などが直接書かれたり、吊看板、立看板などが設置されていたが、現在は撤去されたり消去されている。入り口には車が横づけして罐を積み込めるように、荷台の高さにコンクリートの台が今でも残っている。



鴨川市域における集乳所の分布



Ⅲ. 酪農経営と集乳方法の変化

牛乳の搬送は、朝夕二回絞りで搾乳されると罐に入れ、当初は荷車、自転車などにつけて運搬、その後は車が使用されたが往事雪の積もった時は背負って集乳所に、それ以前は明治乳業などまで運んだこともあったと聞く。

機能や業務については前に記した通りだが、検査も実施された。月毎に集計されて、振込みで代金が決済され、貴重な収入源となっていた。また集乳所からの搬送は、当初は罐によっていたが、後にタンクローリー車になり、それも小型から大型へと発展し、格段の効率向上がはかられた。地元安田ファインテ(株)は、かつては安田製罐などの社名であったが、製罐など乳業史上に果たした役割は大で、酪農発展に尽くした地元産業として特筆される。一時は200人以上の雇用があり、今でもプラントなどのメーカーとして活躍している。

次に、搾乳も、手絞りから搾乳機などの機械絞りに、そしてパイプラインでクーラーへとオートメーション化され、一頭当りの乳量なども計算されて乳牛の管理上便利になっている。それに伴い、通風、温湿度・乾燥など一などの環境も、コスト、資本の問題はあるものの、好条件での飼育がはかられるようになってきている。

集荷所として機能していた集乳所は、酪農・製乳業の歴史、産業化への発展上記録されるべきことのひとつである。これは、牛乳の歴史そのものである。役牛から乳牛への転換は農業の機械化によるが、同時に牛乳の需要も増え、当初の貸し牛などから自分で絞るようになり、更に「ちっこや」と言われた搾乳師などが集乳し、初期の煉乳工場などへ運び加工に供した。また、現金で買い取りもあり、経済的にも農家にとり好都合であったことが産業化への基盤を形成するに至る。一方、煉乳、バター、チーズ、粉ミルクなどの加工技術や設備も、苦心の末に改良が重ねられ、小規模工場から資本力のある大手製乳会社へと発展

を遂げていく。この間、農乳から市乳の需要増と相俟って、質量共にチェックされ、必然的に集乳所の設置が義務づけられた経緯がある。また、このような事業に対応して、乳牛の品種改良や健康維持や畜産のノウハウの指導に獣医、牛馬商(畜産商)、飼料会社、嶺岡乳牛研究所とその前進機関が畜産面で果たして来た役割も大きなものがあり、多方面の業態の発展と、それにより支えられた安房酪農は一大産業へと歩みをすすめたのである。

Ⅳ. 酪農経営と集乳方法の変化

しかしながら、これらに伴い種々の問題が発生し、順風満帆とはいかず課題を負うことになった。すなわち、一つは飼料、もう一つは環境問題である。粗飼料から濃厚飼料への比重が増え、自給が困難な状況から輸入飼料に頼らざるを得ず、コスト高となり経営を圧迫するようになった。また、糞尿処理、悪臭問題などが浮上し、糞尿の肥料化等がはかられ有機質土壌改良などに役立ってはいるが、かなりの資本が必要とされ、経営上大きな負担となっている。本来継続、再生産が企業の根本原則であるが、この面で利潤の確保がはかられないと大変である。

今や牛乳、乳製品は食卓に欠かせないものとなっているが、それだけに良質で安全な品が、安価で安定的に供給されることが求められており、この課題に取り組みつつ生業としての地盤、地位を築きあげて行かねばならない。現代酪農の負っている問題に、政治的な取り組みと共に、酪農・製乳業業界の組織体の役割も、今後益々大きくなると思われる。牛乳・乳製品の消費の拡大がこれを支える柱であり、酪農問題は国民的な問題であるということ、この集乳所の佇まいは「自らの身は消滅の方向にあるとはいえ、酪農発祥の地にふさわしくこれからも地域を支える基幹産業を我々が担ってきたのだから後はよろしく」と語っているように感じた次第である。

資料 鴨川市域の集乳所

1	法名		8	房田(大三)	
大山地区平塚区 集会所手前三叉路 明治乳業 土台 3〜4軒で利用 20年前閉鎖			大山地区平塚区 島津氏の地所 森永乳業 7頭飼養。20年前廃		
2	西畑		9	新井	
大山地区平塚区 明治乳業 建物3×2間, バルククーラー 10〜15軒			大山地区平塚区 区民センターの西 明治乳業 10軒 50年前嶺北から分離		
3	峠(布袋後)		10	大田代	
大山地区平塚区 明治乳業 土台 5軒 20年前廃絶			大山地区平塚区 集会所の角 森永乳業		
4	嶺北第一		11	本郷	
大山地区平塚区 本郷橋金束寄り 森永乳業(明治乳業から) 水槽式(昭和40年代バルクに)			大山地区金東区 富田宅角の井戸際 高梨乳業(富津) 50年前		
5	本上		12	本郷	
大山地区平塚区 小原酪農の角 明治乳業 土台			大山地区金東区 富田宅の奥(高梨煉乳工場跡) 高梨煉乳 松郷の野村軍治氏集乳		
6	小金		13	本郷(苅谷場)	
大山地区平塚区 精米所の隣 森永乳業 2×2間			大山地区金東区 埋田橋とフジボシ(株)の間 明治乳業 建物3×2間		
7	嶺北第二		14	奥入	
大山地区平塚区 椎郷橋際 森永乳業 2×1.5間			大山地区金東区 平塚入口交差点の東 川崎宅角 森永乳業		

注：1) No. は「鴨川市域における集乳所の分布」地図のナンバーと一致する。

2) カルテは、No. | 名称(呼称), 地域地区/場所/納めた製乳企業/施設・設備/軒数/備考, の順。

15	引越		22	元名	
大山地区金束区 富津市境手前三叉路 長狭酪農 3×2間 10 年前まで			吉尾地区北風原区 川辺宅入口傍 長狭酪農 2×1間, 水槽 30 年前まで		
16	埋田		23	豆木	
大山地区金束区 磯貝モーターズの川向こう 明治乳業 公民館前と分かれた			吉尾地区北風原 豆木橋先 関宅前の角 森永乳業 土台 8軒 30 年前		
17	金束		24	長狭酪農	
大山地区金束区 大山公民館前 明治乳業 3.5×2間 煉乳所跡地			吉尾地区北風原区 加古川橋際 森永乳業 明治乳業から分離		
18	古畑		25	北風原	
大山地区古畑区 NTT 傍 明治乳業 3.5×2間 長く稼働			吉尾地区北風原区 安田ファインテ正門傍 森永乳業(明治乳業から) 元名, 豆木に分かれる		
19	奈良林		26	逆川産乳組合	
大山地区奈良林区 大山橋バス停際 明治乳業 土台, 水槽 3~4軒			吉尾地区松尾寺区 逆川橋傍 3×2軒 組合員多数		
20	佐野		27	逆川受乳所	
大山地区佐野区 川崎橋前 森永乳業 佐野, 釜沼の 15 軒ほど			吉尾地区松尾寺区 青年館傍 森永 3×2間 1980(昭和 55)年まで		
21	大幡		28	八丁産乳組合	
吉尾地区大幡区 旧石田橋の傍 明治乳業 跡は整地			吉尾地区八丁区 八丁堰際 森永乳業 3×2間		

29	仲		36	成川	
吉尾地区仲区 亀田酒造向 住宅の敷地 長狭酪農			主基地区成川区 JA 安房経済センター北門 長狭連合 100 軒 40 年前		
30	山入集乳所		37	南小町	
主基地区成川区 川名宅角 長狭連合 土台跡			主基地区南小町区 集荷所前 明治乳業 3×2軒の跡 10 軒		
31	台畑		38	明治乳業	
主基地区成川区 山入青年館先 杉田宅角 明治乳業 3×2間			主基地区南小町区 明治乳業主基工場 明治乳業 1984 年閉鎖, 持込		
32	山入下		39	相川	
主基地区成川区 川辺宅下 長狭連合 3×2間, 2×2.5 間			主基地区北小町区 集会所裏手 長狭連合 9軒		
33	中山入		40	上小原	
主基地区成川区 高橋酪農の下 明治乳業 2.5×2間			主基地区上小原区 上小原協同館向 車庫 長狭連合		
34	川谷		41	下小原	
主基地区成川区 打越橋際 明治乳業 2×2間, 2×1間			主基地区下小原区 諏訪神社傍 長狭連合 3～4軒		
35	原中		42	坂東	
主基地区成川区 環斎屋敷の東 明治乳業 2×1.5 間, 水槽			田原地区坂東区 石井宅前, 田中宅裏 明治乳業 コンクリート土台		

43	大里橋		50	宮	
田原地区坂東区 大里橋バス停側 鴨川酪農 2×1.5 間			曾呂地区宮区 旧道鋤ヶ谷製材所隣 明治乳業 50 年前まで		
44	追分		51	宮	
田原地区太尾区 山口理容脇 長狭連合 竹平,太田学からも納乳			曾呂地区宮区 宮前橋の袂 鴨川酪農		
45	押切		52	宮	
田原地区押切区 栗原自動車の先で県道角 長狭連合 2軒			曾呂地区宮区 宝泉寺角 鴨川酪農		
46	京田		53	代産乳組合	
田原地区京田区 消防 1-4 分団の西 長狭連合 3~4軒 1985(昭和 60)年頃			曾呂地区代区 田中製作所の先 長狭連合 稼働中 1軒 オリオン		
47	竹平		54	東代	
田原地区竹平区 元高橋酪農前 長狭連合 2×1.5 間,バルククーラー			曾呂地区代区 林酪農入口傍 明治乳業 2×1間,水槽		
48	川代		55	仲町	
田原地区川代区 広部宅向 鴨川酪農 3×2間,水槽跡			曾呂地区仲町区 座間宅前三叉路際 鴨川酪農 2×1間,水槽 9軒		
49	貝渚		56	小山	
鴨川地区貝渚区 八幡神社下の角 明治乳業 井戸跡			曾呂地区仲町区 奥野神社先三叉路右 鴨川酪農 3×2間		

57	二子		64	広田	
曾呂地区二子区 旧道バス停際 鴨川酪農 4～5間			曾呂地区上区 鴨川酪農 1.5×1.5 間, バルククーラー		
58	二子		65	東沢	
曾呂地区二子区 二子集会所の敷地 明治乳業			曾呂地区東区 東沢バス停 明治乳業 1.5×1.5 間		
59	二子		66	西沢	
曾呂地区二子区 松本宅入口際 明治乳業 50 年前			曾呂地区東区 川俣宮匠下の馬場川際 雪印乳業(明治乳業から) 2×1.5 間		
60	二子		67	馬場下	
曾呂地区二子区 二子地区の三叉路 長狭連合 建物, 3×1.5 間 5～6軒			曾呂地区東区 馬場下バス停傍 森永乳業(房南) 1.5×2間, バルククーラー 3～4人		
61	川崎		68	久保山	
曾呂地区上区 林秀院先の中里氏ハウス角 鴨川酪農 2×2間			曾呂地区東区 久保山公会堂向 明治乳業 昭和40年代にバルククーラーに		
62	芝		69	松本組	
曾呂地区上区 八雲神社北 100m 鴨川酪農 2×1.5 間			曾呂地区東区 鴨川酪農(明治乳業から) 2軒 久保山にも運ぶ		
63	高鶴		70	坂本(風早)	
曾呂地区上区 公会堂敷地内 鴨川酪農 3×2間 1991年からバルククーラー			曾呂地区東区 わかしお交通前三叉路際 長狭連合(明治乳業)		

71	青山		78	西	
曾呂地区西区 風早バス停から西へ200m 長狭連合 初期			曾呂地区西区 消防2-6分団敷地内 長狭連合 2×1.5間		
72	鳥居橋		79	陣屋	
曾呂地区西区 バス停傍 旧道・新道の交差点 長狭連合(明治乳業)			曾呂地区西区 中央林道水田家へ曲がり辺 鴨川酪農 1992(平成4)年頃まで		
73	小西		80	宮の作	
曾呂地区西区 風早～吹原の途中右 グリコ、雪印 2×2間、水槽式			曾呂地区西区 大井との境 鴨川酪農 2×1.5間 3軒 昭和末まで		
74	小西		81	荒戸	
曾呂地区西区 雪印の隣 長狭連合			曾呂地区畑区 消防2-5-2分団脇の畑 長狭連合 最も古い 持ち寄り		
75	吹原		82	峯	
曾呂地区西区 水田宅入口 長狭連合 3×2間、600ℓバルククーラー			曾呂地区畑区 東善寺先 長狭連合 土台 九本木の3軒も仲間		
76	九本木峠		83	橋本	
曾呂地区西区 峠頂上岡安宅 明治乳業 2.5×1.5間			曾呂地区畑区 慈眼寺前辺り 長狭連合 2×1.5軒 7～8軒		
77	九本木峠下		84	谷	
曾呂地区西区 岡安宅入口 長狭連合、明治乳業 2×1.5間			曾呂地区畑区 熊野神社先 長狭連合 3×1.5間、水槽式		

85	市井原		92	西	
曾呂地区畑区 西江見境辺り 長狭連合 2×2間 花卉集荷所になる			江見地区西真門区 旧道入口向 真門海岸道角 明治乳業		
86	西山		93	東	
太海地区西山区 田原宅前の三叉路 房南酪農協(森永乳業から) 2.5×2間			江見地区西真門区 旧道入口倉庫前の空き地		
87	天面		94	大日	
太海地区天面区 旧道 公園際 明治乳業 精米も兼業			西条地区打墨区 武志家入口角看板辺り 鴨川酪農 水槽式		
88	横根		95	峰中	
太海地区横根区 薬師堂前 明治乳業 2.5×2間			西条地区打墨区 アスカ駐車場脇川崎宅角 鴨川酪農 バルククーラー 10 軒		
89	吉浦		96	津辺	
太海地区吉浦区 吉野屋商店倉庫 明治乳業 10 軒			西条地区打墨区 消防1-5分団前(打墨神社前) 鴨川酪農		
90	東江見		97	金山	
江見地区東江見区 旧道 房川宅向 明治乳業 土台 5～6軒			西条地区打墨区 金山川清水橋先 鴨川酪農 5～6軒 山の水利用		
91	曲松		98	和泉産乳組合	
江見地区東江見区 公会堂辺り 酒井酪農前 房南酪農 2×1間, 水槽			東条地区和泉区 公会堂前 久保宅角 鴨川酪農 3×2間, 水槽		

99	新田		106	天津第二	
東条地区西町区 新田渡辺牧場入口 鴨川酪農 2×1.5 間, パルククーラー			天津地区 新町バス停傍 鴨川酪農 君島宅と防火水槽 4〜5軒		
100	広場		107	天津	
東条地区広場区 公民館先三叉路飯沼宅角 明治乳業			天津地区 天津交差点鎌田電気前 明治乳業		
101	小倉酪農		108	天津	
東条地区東町区 浦の脇八幡宮と三叉路間 明治乳業 2〜3軒			天津地区 引土コミュニティ傍		
102	浦の脇		109	奥谷	
東条地区東町区 三叉路あべ理容店隣 明治乳業			小湊地区奥谷 奥谷青年館向 鴨川酪農		
103	東町		110	奥谷	
東条地区東町区 地藏橋際 東町コミセン角 鴨川酪農 5〜6軒			小湊地区奥谷 渡辺宅向 岐バス停側 鴨川酪農		
104	東町				
東条地区東町区 東町コミセン向 小倉宅奥 明治乳業 土台					
105	天津第一				
天津地区 元栗原酪農入口 鴨川酪農 2×2間 4〜5軒					

コメント 近世牧の魅力発信と課題

吉林 昌寿

富里市教育委員会

I. 千葉県内の近世牧

千葉県内には、徳川幕府直轄牧であった小金牧・佐倉牧・嶺岡牧の近世牧が存在する。

小金牧は、江戸時代の早い段階から牧内の開発が行われ、牧域の縮小のみならず、牧の消滅までも生じた近世牧である。

佐倉牧でも同様に新田開発は行われたが、その本格的な開始時期が「享保の改革」に伴うものであったためなのか、牧域の縮小こそあれども、消滅した牧は存在しない。

一方、嶺岡牧は立地の違いからなのか、大規模な新田開発には至らず、牧の全容が非常に良く残されている。

II. 富里市における調査成果

佐倉七牧のうち、内野牧と高野牧の最終的牧域の全域を抱える富里市は、成田国際空港の開港に伴い、急速に都市化が進んだ地域である。それまでは、一面に畑地が広がる農村風景の中に、近世牧の遺構である野馬土手が佇むように風景に溶け込んでいたのであろう。

しかしながら、開発の波は容赦なく畑地帯を住宅地に変え、多くの野馬土手は消えてしまったのである。但し、成田空港の開港という画期は、埋蔵文化財の保護体制が確立したのちの事になり、多くの野馬土手について発掘調査が実施され、記録による保存がなされたのも事実なのである。

これは、佐倉牧全体を通して同じことが言え、東京に近い小金牧の開発及び近世遺牧遺構の消滅とは一線を画するものであろう。

佐倉七牧のうち、捕込跡が現存するのは、油田・取香・高野・小間子の4つの牧であり、

半数は残されていることになる。

県指定文化財である油田牧の捕込跡を除いて、3つの捕込跡が印旛地域に所在しており、その全てについて調査が行われている。

III. 課題

様々な分野において、小金牧や佐倉牧の調査や研究は、継続して行われてきた訳ではあるが、個別的なものが多く、学際的な調査や研究とは言い難い状況である。一方で嶺岡牧の調査は学際的に取り組んでいて、今後の研究の方向性を示していると言えよう。但し、調査や研究の量的な部分での充実が待たれる。

その様な現状に対して、近世牧研究はその前後を含めた流れの中に位置づけ、新たな視点での研究も必要となろう。特に嶺岡牧は、地域畜産会社や製乳企業が設立された場所でもあり、近世牧からの流れも重要であろう。

それに対して、小金牧・佐倉牧は開墾地として切り開かれてしまい、牧の面影も野馬土手などの一部の遺構のみとなってしまった。

但し、佐倉牧の一部は、下総御料牧場の前身となる下総牧羊場や取香種蓄場が明治8年に開設され、牧の跡地利用は嶺岡牧に近いのかもしれない。

そして、これらの魅力を余すことなく発信するためには、近世牧を支え続けた野付村の人々のように、それぞれの牧を支える地域の人々の力が必要となる。現状ではそれぞれの牧毎の活用であり、ニッチな市場でしかないのだとしたら、千葉県における近世牧トータルでの活用として広がりを見せた時に、その魅力が多くの人々を捉えるのかもしれない。

コメント 文献にみる嶺岡牧研究の現状

岡田 晃司

館山市教育委員会

近世嶺岡牧の概要を記した文献については、1880年から1883年の間に著された嶺田楓江「千葉県古事志」(1932年『房総文庫4』所収)の「蓑岡山牧場」、1907年の斎藤東湾『安房志』の「嶺岡牧場」が早い。その後、野続野付最寄村々の村明細を記した「嶺岡五牧鏡」という史料と、「峯岡牧起源及沿革取調」の一部が1943年に『房総叢書 第十巻』に翻刻され、続いて1958年に池田和弘が『平群村誌』で「峯岡牧起源沿革」(別称「川名七郎翁遺稿」「平群村史編纂に関する矢鱈書」)を紹介して嶺岡牧の概要理解に供されるようになった。

その時期は千葉県が県史編纂事業を進めており、1954年に『千葉県史料 近世篇 安房國上』の「眞田益太郎家文書」で嶺岡牧関連史料が1点翻刻され、1956年の『千葉県史料 近世篇 安房國下』では「永井武四郎家文書」の牧馬里下げ里上げ帳や惣牧士由緒書など14点、「古市保家文書」の牧士村役人勤方教諭書など嶺岡牧を理解する重要史料が翻刻され、小笠原長和が「安房国の近世史料について」として嶺岡牧の史料概況を紹介している。

こうした史料に基づいて嶺岡牧を詳細に紹介したものは1961年の『安房酪農百年史』である。その後1996年に『鴨川市史 通史編』で菅野貞男が「嶺岡牧と農民」、2007年に『千葉県の歴史 通史編 近世1』で高見澤美紀が「房総の牧場と村々」を執筆し、牧の支配や馬の管理、牧士の由緒と職務、野付村野続村の負担などについて解説している。

個別の研究はまだ決して多いとはいえない状況で、1962年の荒居英次「徳川吉宗の洋牛馬輸入とその影響」(『日本歴史』174号)、1965

年の荒居「近世における幕府牧の経営」(『日本歴史』202号)、1993年の大谷貞夫「安房国峯岡牧の再興をめぐって」(『野中徹先生還暦記念論集』)がある。大谷の論考は寛永期から嶺岡に馬屋が存在したこと、村牧士による嶺岡牧の再興運動が享保期の牧再興につながったことを指摘した。2009年には大谷の研究が『江戸幕府の直営牧』としてまとめられ、吉岡孝が「大谷貞夫氏の江戸幕府牧の研究継承のために」で嶺岡牧再興運動についての再評価している。今回の金澤講演は大谷の成果を踏まえて寛永期における嶺岡牧での馬の管理実態を明らかにしたものである。

史料については、1991年の『鴨川市史 史料編(一)近世』で60点(牧士関係、野馬の出生・里下げ・死亡関係、捕え馬・払い馬関係、狼狩り関係、白牛関係、その他)がまとまって紹介されたほか、1999年の『千葉県の歴史 資料編 近世2』でも40点(幕府牧の成立と衰退、幕府牧の再興と支配、幕府牧と野付村・野続村)の史料が翻刻され、3点について史料解説が付された。その他にも古文書調査の成果として目録が刊行されており、1973年『昭和47年度千葉県古文書調査目録』、1977年『千葉県史料調査報告書1 千葉県古文書目録安房国1』、1981年『千葉県史料調査報告書3 千葉県古文書目録安房国2』、1986年『丸山町史 史料集』、1995年『千葉県史編さん資料 千葉県地域史料現状記録調査報告書第1集 安房郡丸山町石堂謹司家文書』に関連史料がみられるが、目録も翻刻もまだ一部にすぎない。研究を進展させていくには、牧に関する史料を集約することが課題である。

コメント 未来の歴史文化遺産を育てる

川口 友子

一般社団法人地域環境資源センター

I. 生活のなかの歴史文化遺産

地域づくりにおいて、地域独自の地域性や歴史性をもつ歴史文化遺産は、重要な地域資源であるといえる。しかしながら、それらの地域資源は、地域の人々にとってはごく「普通」で身近なものともいえる存在である。その「普通」な存在が、どれだけ地域固有でかけがえのない存在であるかは、普段から目にしている人々にはあまりピンとこないかもしれない。

例えば奈良県明日香村は、歴史的文化的な地域であり、1980年には「明日香村における歴史風土の保存および生活環境の整備等に関する特別措置法」(通称「明日香法」)が制定されるなど、歴史的風土の維持保全に取り組んでいる。一方で同時に、歴史文化遺産の維持・保全の問題と人々の生活との兼ね合いや、地域づくりにおける歴史的風土の位置づけなどの課題も抱えている。

筆者は、この明日香村において、村に住まう人々は明日香村の歴史的環境をどう見ているのかについて「心象風景」という観点から調査を実施したことがある。その結果、数多くの名所・史跡が点在する地域に住んでいながらも、自分の住まう地域の心象風景として描く風景は、日常的に行く名もない道や場所である、という人も多くみられた(川口ほか2003)。

これは、歴史文化遺産が人々にとっての日常、つまり「普通」にあるものであるのだから、当然のことともいえる。しかしながら、歴史文化遺産を地域づくりに活かしていこうというときに、整備や、日常的な小さな維持管理が必要になった場合、あまりにも身近にあるためか、なかなか理解や協力を得られない、というようなケースがみられることもある。

このような状況に対し、歴史文化遺産を地域づ

くりを活かすには、歴史文化遺産の価値をあらためて再発見し、あらためて顕在化することが必要なのだといえる。

II. 「普通」の価値づけと活かし方

数年前から、「地域活性化」や「地域振興」といったテーマで、都市部の若者が農村部に行って地域づくりに携わる、という取組が多くみられるようになった。このような取組によって、外部からのまなざしが向けられ、それまで埋もれていた地域資源が「発見」される、という動きにつながることもある。しかし、せっかく発見された地域資源も、マニュアル的な見方しかしなかったら、やがてまた「普通」の存在になってしまうかもしれない。

歴史文化遺産のような地域資源に価値を見出し続けるためには、まずは地域の人々が、見方を変えることである。遺産がどのように地域で形成されてきたか、というプロセスを認識することで、ただの「遺産」ではなく、地域で紡ぎ出されてきたストーリーを持った遺産になってくる。そのストーリーを「体得」すれば、地域づくりにおける歴史文化遺産の新たな位置づけを描くことができるかもしれない。

【文献】

川口友子・糸長浩司・栗原伸治・藤沢直樹(2003)
心象風景にもとづく明日香村の「万葉の風景」
づくりの課題, 農村計画学会誌論文特集号
Vol.22, pp.49-54.

展示資料

牧士 石井家所蔵資料



【石井家資料 古文書】

資料 1 寛永十一年房州二而御馬飼料之御帳



1634(寛永11)年戊正月12日
豎冊

縦 30 cm, 横 20.5 cm

坂東の厩を預かっていた石井市之丞、石井作左衛門から、厩方役の大久保藤三郎、高野喜三郎に出した、一年間に厩の馬に与えた飼料の記録。

1頭毎に、馬の毛色、米と大豆を与えた量、給餌期間、及び上馬・払馬・斃死などを記している。

資料 2 寛永十四年房州二而御馬飼料之御帳 扣

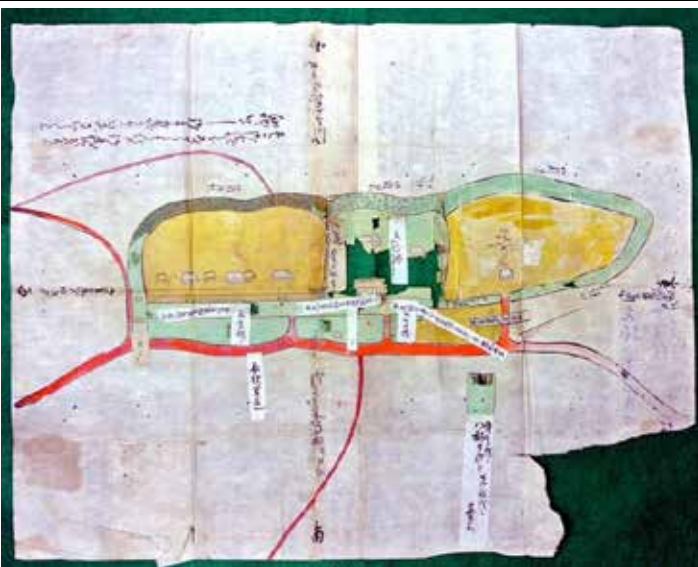


1637(寛永14)年丑正月11日
豎冊

縦 29 cm, 横 19 cm

寛永13に米・大豆を与えた馬として28頭、うち3頭を上馬に、1頭が死亡したことが記されている。上馬は、阿部豊後守、諏訪部源次、秋山弥左衛門、加藤助三郎、中山勘兵衛が見分し、浅草御馬屋いなかき善右衛門に渡している。

資料 3 石井家附近絵図



1695(元禄8)年4月28日
作成:平岡三郎右衛門手代 樺山甚八

石井家の屋敷前に馬場が描かれている。同様の絵図が1872(明治5)年にも描かれている。



←1872年
の絵図

資料 4 小金御鹿狩御場絵図



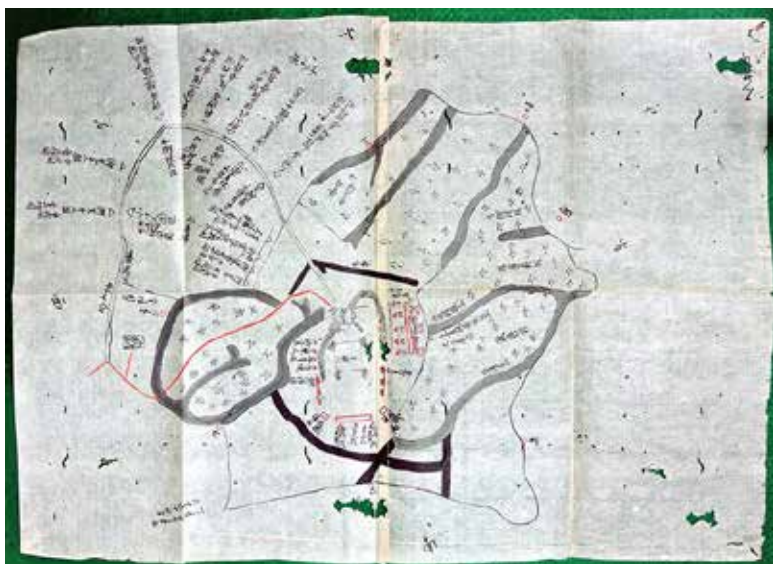
江戸時代

縦 33 cm, 横 75 cm

徳川将軍が小金中野牧で行った狩りの陣構えを描いた図。

御鹿狩は、8代将軍徳川吉宗が、1725(享保 10)年、1726(享保 11)年の2回、11代将軍徳川家斉が 1795(寛政7)年、12代将軍徳川家慶が 1849(嘉永2)年と、4回行われている。石井家には、寛政の御鹿狩の資料が多く残る。

資料 5 小金原鹿狩絵図



江戸時代

縦 40 cm, 横 73 cm

御鹿狩での担当を示した絵図。

将軍が上覧する「御立場」、網を張った「きしやば」(騎射場)、警衛の小姓などが描かれている。

資料 6 寛政七年小金原御鹿狩控帳



1795(寛政7)年卯正月

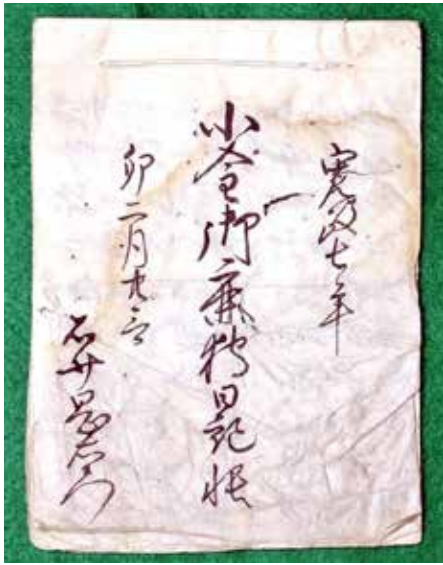
石井岡右衛門控え

横冊 縦 12 cm, 横 17 cm

寛政の御鹿狩で、石井岡右衛門が五番組牧士として勤めている。



資料 7 寛政七年小金御鹿狩日記帳

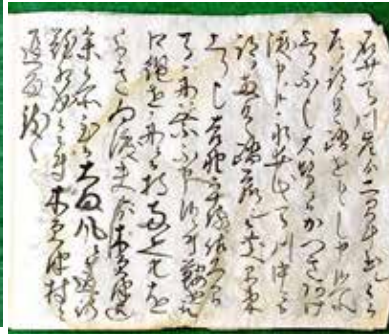


1795（寛政7）年卯2月23日

石井岡右衛門

横冊 縦 13 cm, 横 17 cm

御鹿狩に嶺岡牧の牧士が出向いた時の日記帳。



【石井家資料 民具】

資料 8 小田原提灯



江戸時代

直径 13 cm

上蓋がはずれている。

提灯の胴部に、石井家の家紋である轡紋が墨書きで縁取した朱書きで、「石」の字が墨書されている。

資料 9 小田原提灯入れ・蠟燭入れ



江戸時代

直径 2 cm, 長さ 18.8 cm で, 長さ 1,2 cm の木栓が付いた 2 本の蠟燭入れを竹皮で結んでいる。この竹皮に、畳んだ小田原提灯を入れる長さ 16 cm の布袋口を閉める紐を結わいている。

資料 10 矢立



明治時代

真鍮製 平丸形

長さ 19 cm 墨壺直径 4.6 cm



資料 11 瓢箪型木箱入り天秤ばかり



江戸時代

瓢箪型木箱 長さ 26.5 cm

天秤皿 直径 7.2 cm 象牙性の竿



資料 12 天秤ばかりと分銅



江戸時代

竿の長さ 36.2 cm

天秤皿 直径 12 cm, 10 cm

天秤皿に極印が印されている。



【石井家資料 江戸時代の馬具】

資料 13 轡（くつわ）



鉄製

轡（はみ）：長さ 20.5 cm

鏡板：直径 7.4 cm の丸に十字状

立間（たちきぎ）：長さ 3.7 cm

引手（ひきて）：12.6 cm

鉸具頭（かこがしら）に、僅かに朱塗り痕が認められる。

資料 14 立間（たちきぎ）・組紐



立間

長さ 30 cm（環状部 13 cm, 厚総 17 cm）

組紐

長さ 173 cm が 2 本

長さ 182 cm が 2 本

径 1.2 cm

黄と緑の繊維で撚る。

資料 15 手綱（たづな）・三尺革（さんじゃくがわ）



手綱

幅 4 cm 長さ 278 cm

縞に藍染め。

三尺革

長さ 76 cm 最大幅 8 cm 皮製

亀甲に花菱紋、二両引き七曜紋。



資料 16 三懸（さんがい）



2組の三懸
面懸（おもがい），胸懸（むながい），尻懸（しりがい）が揃う。
長い厚総で飾る。



資料 17 鞍（くら）・切付（きっつけ）・肌付（はだつけ）



木製の鞍橋に革製の切付，肌付，鞍が取り付けられている。鞍橋の高さ 26 cm。黒漆地に金で轡紋を描く。



資料 18 鞍（くら）・切付（きっつけ）・肌付（はだつけ）



黒漆塗りの木製鞍橋に，革製の切付・肌付が取り付けられている。

鞍橋の，高さ 26 cm，幅 36 cm，長さ 40 cm。



資料 19 鞍の座布団・環鞍（わしおで）



座布団

幅 29 cm, 長さ 45 cm, 厚さ 3 cm。藍染めの布団皮に綿を詰める。

環鞍

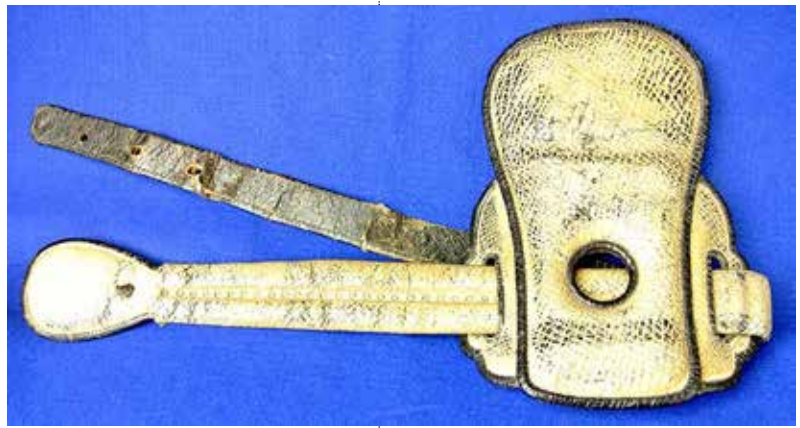
長さ 17 cm。径 1 cm。

資料 20 力革（ちからかわ）・馬栓（ばせん）



力革3本(長さ 102 cm, 111 cm, 98 cm)

馬栓(幅 17 cm, 長さ 25 cm)



資料 21 舌長鐙（あぶみ）



鉄製

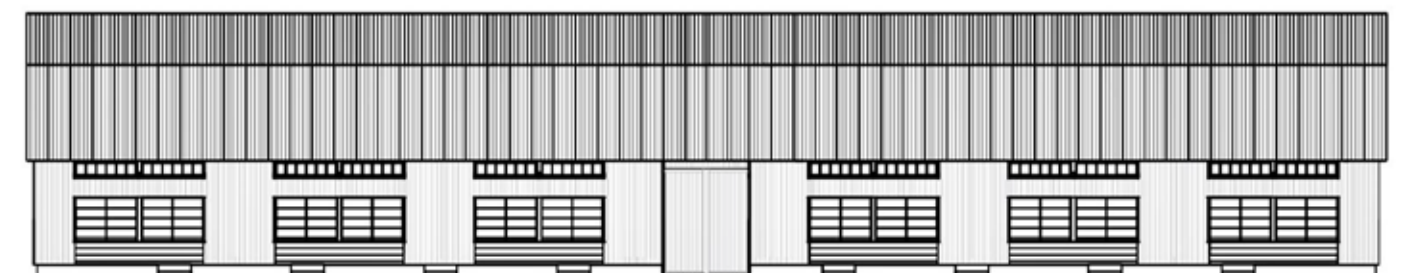
高さ 25 cm 幅 12 cm 長さ 30 cm
踏込は, 8 枚の横木を並べ, 漆を塗る。

鳩胸, えみに漆痕がみられる。

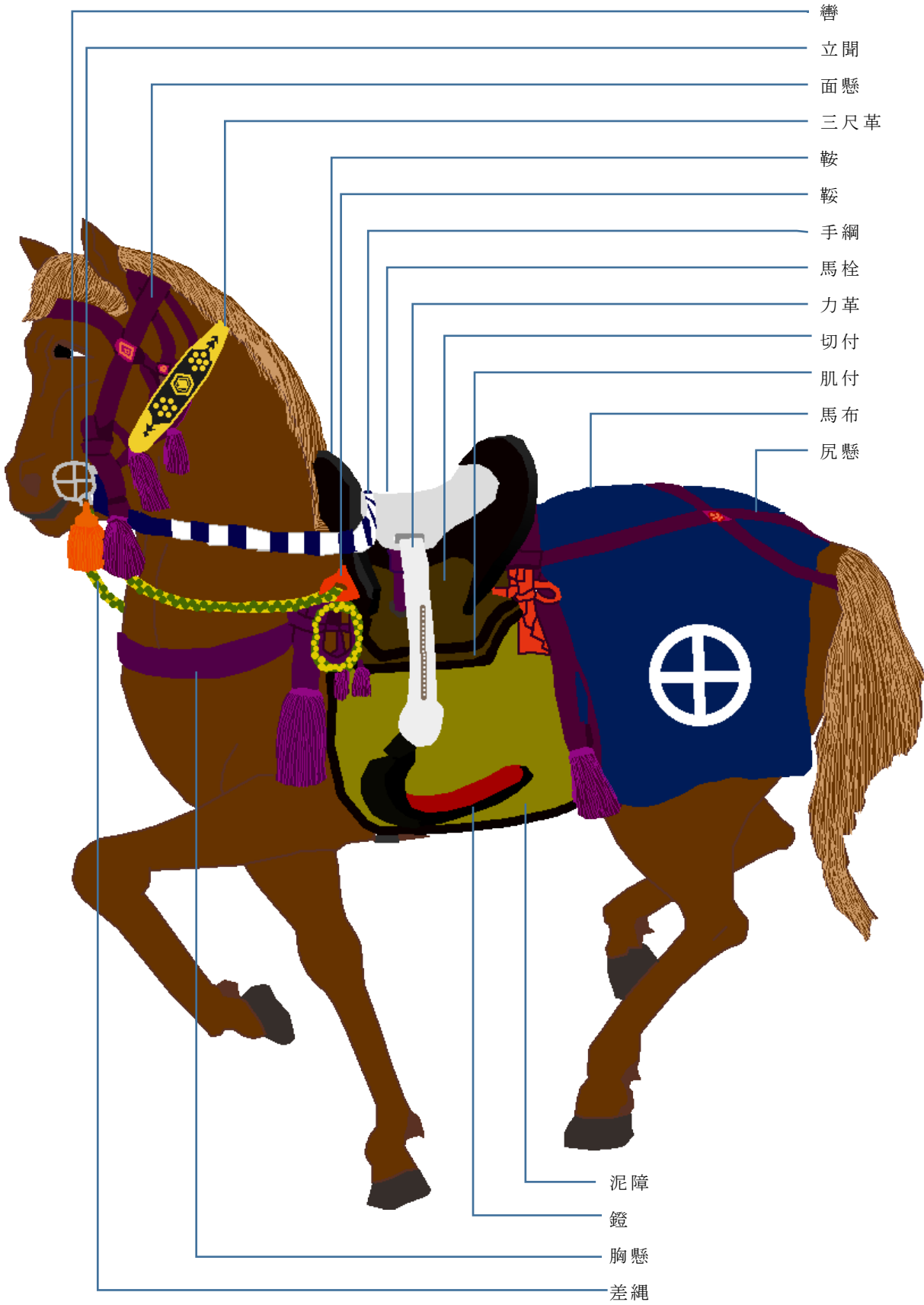




1939(昭和 14)年に開設された和光堂千歳牧場(1951 年閉鎖) 写真:アサヒグループ食品株式会社提供



現在残っている和光堂千歳牧場の牛舎(黒澤氏所有 2016年に屋根が竜巻被害に遭う前)



馬装